
血だまりスケッチ

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血だまりスケッチ

【Nコード】

N58990

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

私立やまぶき高校とひだまり荘がある平和な街で起きた殺人事件…そしてゆのはこの血塗られた残酷極まりない事件の非常に非情な『真相』にやがて近づいてしまい…

(前書き)

原作者・蒼樹うめ先生、ごめんなさい

※グロテスクな描写や要素があるため閲覧超注意です、心臓の悪い読者の皆様はくれぐれもご注意を…

— ひだまり荘…それは、美術科クラスがあるため地方からの入学者も多い人気校であるやまぶき高校の真ん中に位置する小さなアパート、美術科の変わり者達が住んでいることで有名…。

— …なのだが。

— ある日突然、まさか…それが恐怖と惨劇の舞台になるなどと、誰が想像出来ただろうか…？ いや、出来ない…そう、出来なかったのだ…。

— ひだまり荘。

「はあゝ疲れたなゝはむ♪あむ♪」

— 肉まんを頬張りながら自分の部屋に戻るスタイル抜群な制服姿に

長い金髪の少女・宮子、彼女は食べているこの瞬間が何よりも幸せなのだ。

―彼女のその何かを食べてる時の幸せいっぱい笑顔は本当に癒さるものである：しかしそれ故に宮子Ⅱハラペコキャラが固定されてしまっていたりする。

「宮ちゃん、待ってよう。」

「あはは♪ゆのっち、遅いよう。」

―パタパタと慌ただしく走りながら、カーキ色の髪に『×型』の髪止めを左右両サイドに付けた制服姿の少女・ゆのが宮子を追いかける。

「お帰り、二人共、寒いから早く入りなさい、今日はヒロがお鍋作ってるから。」

「ヤッホー！！お鍋♪お鍋♪」

「わあ、いいですね、お鍋♪」

―二人の先輩であるボーイッシュな濃紺色のショートヘアの眼鏡をかけたスレンダーな体型の少女・沙英が部屋から顔を出して冷え込む夕方の外にまだ居る二人にヒロの部屋に来るように言い、今夜は鍋だと教える。

―二人は一旦部屋に戻って着替えてから早速、先輩・ヒロの部屋に行った。

「ヒロの部屋。」

「いっぱいあるからたくさん食べてね♪」

「はーい♪」

「…って、宮子早ッ!？」

「赤毛の髪ををお団子状に纏めた少女・ヒロが言うまでもなく、いきなり宮子が箸でグツグツ煮立ってる鍋から肉を摘んで食べていた。

「もう宮ちゃんったら〜。」

「あはは♪…って、熱っちゃッ!？」

「ほら、慌てて食べるから!」

「楽しく談笑しながらの鍋を食べる四人、ここでふと、ゆのが『あること』を宮子に聞いてみた。

「そういえば宮ちゃんはなんでそんなにハラペコなの?」

「そういえば…?」

「やたらもの食べるよね、アンタ? 確かに一般的な女子高生の食べる量を遥かに越えてるといえるかなんというか…。」

「んにゃ?」

「ゆの・ヒロ・沙英は常日頃から彼女の大食いぶりは知ってたが何

か理由があるのでは？」と思って尋ねてみた。

「ん〜？特に理由は無いけど、ただ食べることが好きなだけなんだ〜♪ん〜美味し〜♪」

「どうやら理由云々など無くて本当に純粹に食べることが好きらしい、満面の笑みを浮かべてパクパク食べる。」

「へ〜そうなんだ〜。」

「見れば見るほどいい食べっぷりね〜。」

「見てるこっちがお腹いっぱいになってくるけどね…。」

「…と、こんな感じでこうして楽しい夕食の時間は過ぎていく…。」

「あ、後でベリマで肉まん買いに行こう♪」

「「「まだ食べるの！？」」「」」

「つくづく宮子の食欲に圧倒されっ放しな三人であった。」

「翌朝、ゆのの部屋。」

「ふあああ〜…ええと、今日って確か雨だっけ？」

「ゆのはテレビを点け、天気予報を見ると画面では女子アナが今日の天気の解説をしていた。」

『本日、○○地方の天気はくもりのち雨、となるでしょう。』

「やっぱり雨かあゝ…ん？」

『…さて、次のニュースです、本日の今朝5時頃、やまぶき高校に通う男子生徒・○○さんが遺体で発見されました、警察は○○さんが他殺であると断定し現在犯人の…。』

「え!？」

一女子アナは天気予報の後にやまぶき高の男子生徒が何者かに殺害されるなどという物騒なニュースを言い出した…こういったものが苦手なゆのは大層驚く、自分もやまぶき高に通ってるため尚更だった。

『○○さんはご両親に寄れば、「小腹が空いたからコンビニに行つて来る」と言い、家を出たきりで…。』

一ゆのは素早くリモコンを取っては『ピッ』とボタンを押してテレビを消した。

「…嫌だよ、こんなの…朝から…。」

一暗い表情を浮かべながらゆのは制服に着替え、登校の準備をした。

一やまぶき高校。

「ねえ聞いた？」

「○○が殺されるなんてな…。」

「私怖ーい…。」

ーやはり自分の高校の生徒が殺されるなんて物騒な事件を話題にしない奴など居ない…校内の生徒達のほとんどは殺人事件の話で持ち切りだった。

「…。」

「みんな好きだねーそーゆー話…ゆのっち？あー…。」

ー先程から沈黙しているゆのから表情が抜け落ちていることに宮子が気づき、フォローを入れる。

「そっかあー…優しいね、そこがゆのっちのいいところだと思うよ、でもそんなに落ち込まないでよ、ね？」

「…うん、ありがとう…宮ちゃん…。」

ー自分とは接点がないとはいえ自分の通う学校で、身近で人が死んだのだ、優しい性格の彼女には些か堪えられなかったのだ、その気持ちを汲み取り宮子はのほほんと語りながら彼女の頭を撫でる。

「はぁーい、みなさーん、席に着いてくださいねー。」

ー濃緑のロングヘアのおっとりした口調の女性のゆの達の担任・吉野屋がやって来る、普段は何らかのコスプレをしたりしてるが今日ばかりは多少自重してるのか、喪服であった。

「最近は何事でもすからみなさんも注意してくださいね、それでは授業の前に：黙祷。」

一さすがに彼女も堪えてるようであり、吉野屋は全員に死んだ男子生徒への黙祷をさせてから授業をした。

一放課後、ひだまり荘にて。

「いやいや〜♪今日も絶好調〜♪」

「も〜宮ちゃんったら、ふふっ。」

一本日も絶好調な食欲を見せた宮子：なにせ昼間には食堂と購買でカレー三杯・ラーメン一杯・カツ丼二杯・牛丼一杯・ミックスフライ定食一つ・ジュース十本・シュークリーム五個・あんパン三個・チョコレート六枚・ポテトチップス二袋、そして近所のコンビニ・ベリーマーケット（通称・ベリマ）で肉まん・あんまん・ピザまんをそれぞれ二つずつの計六個とサンドイッチ一つ・バニラアイス三個・プリン五個も食べたという明らかに一女子高生の食べる量では断じてない量（主にカロリー計算とか）とかを食べ切ったという快挙を成し遂げたのだ。

一間違いなく大食いチャンピオン目指せる領域にある彼女の食欲を見て朝方の悲しい雰囲気からゆのは今ではすっかり抜け出せていた。

「今日は暖まるのいいな〜シチューとか〜♪」

「ふえ！？もうお腹空いたのっ！？」

「えへへ〜♪」

「もー！宮ちゃんの食いしん坊！」

一底無しの食欲にゆのはやはり圧倒されるしかなかったが、宮子の笑顔を見るとついつい許してしまう自分がいた。

「今日はどうんよ。」

「わーい！ヤッホー！！そしてデザートはベリマで杏仁豆腐♪」

「「デザート！？」」

ーリクエストのものとは違ったものの今晚のメニューが決まってその場でクルクル回りながらまるでこの世に生まれたことを神に感謝するが如く、宮子は大いに喜んだ…最早、ゆのと沙英はひっくり返って仰天するしか出来なかった。

ー翌朝。

『ニュースです、本日の今朝6時頃、やまぶき高校に通う女子生徒の××さんが他殺死体として発見されました…。』

「うう…！？」

ーまたもや謎の殺人事件の犠牲者が出てしまった、ゆのはリモコンに手をかけてテレビを消そうとしたが…。

『××さんは昨日殺害された○○さんと同じく、夜食を買いに近所のコンビニ・ベリーマーケット、通称ベリマで買いに行ったところであり、金品には一切手を出されておらず、○○さんが買ったカップ麺とヨーグルトが何者かに持ち去られました、警察はこの犯人は同一犯と見て…。』

「…ん？」

「今の女子アナの言葉に何かが引かかるゆの…だが結局何も解らないまま登校の準備をする…。」

「宮ちゃん、早く行こ…う!？」

「パクパク…ムシヤムシヤ…ガツガツ…あぐあぐ…うまうま♪」

「宮子の部屋と彼女を見たゆのは思わず絶句した…。」

「今、現在、宮子は炊飯器にまるまる六合はあろう米にマヨネーズやバターや醤油、卵を複数個投入してスプーン代わりにしゃもじを使って食らっており、さらには彼女の部屋の中には異常なまでに散乱している食品のパックや袋が散乱し、色んな食べ物の臭いが混濁してて軽く異臭になってたため、ゆのは鼻を塞いだ。」

（おかしい…昨日も思ったけど朝からこの食事量はおかしい…!!）

「宮子は確かに食べることが好きだ、しかしこればかりは自分から見ても火を見るより明らか…あまりにも許容出来る範疇ではない。」

「んにゃ? おお、ゆのっちゅおはよ♪」

「お…おはよ…宮ちゃん…。」

一ゆのは満面の笑みを浮かべる宮子に嫌な予感を感じつつ、口端を引き攣らせながら挨拶を交わす…。

一しかし、最悪なことに…ゆのの嫌な予感がやがて現実になる、そう…足元からゆっくり忍び寄るように…ジワジワ、と…。

一またまた放課後…宮子は今日は珍しく、ゆのと帰らずに一人で先に帰った。

（宮ちゃん…本当に、どうしたんだろ…？）

一いつも一緒に登下校を共にする友達が傍になくて寂しさを感じる…最近少し変になったとはいえ宮子はゆのがひだまり荘に来た時に出来た初めてのかけがえない存在には変わらないのだ、やはり心細い…。

（大丈夫…気のせい、きつと気のせい！）

一ゆのはひだまり荘への帰路を走る…きつと帰れば、いつもの光景

が待っている。

（ヒロさんが美味しいごはんを作って、宮ちゃんがいっぱい食べて、沙英さんがツツコミ入れて、私はみんなと笑って…。）

一息を切らしながらも走るのを止めないゆのはそんなサイクルがあるいつもの光景が待っていてくれることを信じて、ひだまり荘に辿り着けた。

「ただいま！」

一だが、いつもみんなが集まるヒロの部屋で彼女が見た光景は暖かなひと時のそれとは掛け離れた『赤い世界』だった…。

（これじゃあ、ひだまり荘じゃなくて血だまり荘だね〜♪）

一…と、お気楽な宮子がもしも傍にいたらなら絶対に言いそうなド派手な模様変えだった。

一返り血が床や天井…部屋中にベツタリと染みつき、ナニカがナニカを貪り喰らう様な音が耳に飛び込む…。

一床には赤いナニカの一部…人間の手足や臓腑ハラワタが複数個ほど散らばっており、まるで袋から開けたばかりのバラバラなパズルみたいな

一嘔吐してるゆのに宮子はあくまでもいつもと変わらない優しい口調でゆっくり語りかける。

「ファミレスで自分が頼んだものよりも他の人が頼んだものの方が美味しそうに見えるってこと、私はたくさんあるよ♪えへへ♪」

「うぎ…げは…ごふ…!!」

一最早、宮子の質問に答えられる状態にないゆのはただただ胃の中のものを吐き出すしか出来ない。

「だから一昨日も昨日も私が買ったものより美味しそうなを買ってた人がいたから、交換してって言ったら断られてさ♪だからちよつと『手荒なこと』やっちゃった♪てへ♪」

（宮…ちゃん…!!）

一…どうやら一連の殺人事件の犯人はゆのの目の前にいる宮子だったらしい、灯台下暗し…犯人が身近、しかも自分の友人…いや、友人…『だったナニカ』のせいとは…。

「私はさ…とにかくお腹が空くの、小さい頃からたくさん食べてきた、だけど食べても食べてもお腹いっぱいにならなくて…幸い太りにくい体質だからよかったけど、小学生の頃は男子から『大食い女』ってからかわれて泣いたこともあったよ。」

（宮ちゃん…？）

一普段明るく元気な宮子にそんな過去があるというのがイメージ出来ないゆの…しかし、彼女は最早自分が知る宮子ではない…否、宮

子であっていいはずがない、目の前にいるのはタダの『ヒトゴロシ』だ…。

「食べることが私の道楽でね、こう見えても世界中の珍しいごちそうをたくさん食べてきたんだよ♪あと食べてないので残ったのはそう…。」

—宮子は次の発言でゆのの心を完全に砕いてしまった。

「『人間』、だよ♪」

「いやあああああ！！た、助けてエッ！！沙英さーん！ヒロさーん！！」

「落ち着きたまえ♪けどヒロさんは脂が乗りすぎるし、沙英さんは痩せすぎてるし、そこでちょうど良さそうなゆのっちが…♪」

「放して！放してエッ！嫌だああああああアッ！！」

—泣き叫びながら先輩二人のことを必死で呼びながら暴れるゆのを宮子はニコニコしながら、かつ、至って冷静に…あっさりと抑えつけて、手足にガムテープを巻いて縛り上げる。

「最初に断らなきゃいけないけど…。」

一縛られて床に転がされてるゆのが見上げた宮子の変わらない笑顔が一瞬だけだが『真っ黒』に見えた、そしてゆのの目の前にナニカが置かれる…それは…。

「実は沙英さんとヒロさん、少し食べてみたけど…でもやっぱり美味しくなかったよ♪えへ…よかったら、ゆのっちも食べて見る？」

一沙英とヒロの生首だった。

「きゃあああああああああああああああああああ！
」

一 今宵、ひだまり荘でまた一つの血だまりが増えた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5899o/>

血だまりスケッチ

2010年10月30日13時27分発行